

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32677

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K01046

研究課題名（和文）フランスにおけるもう一つのマイノリティ 黒人、国民史、歴史認識

研究課題名（英文）Another Minority in France: The Black Population, National History, and Historical Perceptions

研究代表者

平野 千果子 (Hirano, Chikako)

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：00319419

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「黒人」という存在がフランス国民史のなかにほぼ不在であるという問題意識の下、彼らを含めた国民史はいかに書かれるべきか、探究したものである。黒人はフランス史において主軸となる歴史には見えなくても、つねに存在してきた。従来、黒人への関心は大西洋奴隷貿易や奴隷制に集中してきたが、近年ようやくフランスでも、このテーマの研究が緒に着いたところである。この問題は、過去をどう捉えるかという歴史認識にも関連する。黒人という、今日のマイノリティを取り上げたことで、女性やジェンダーという、さらなるマイノリティの問題にも視野が開かれ、結果として本研究はきわめてインターセクショナルな視角をもつものとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一般に、フランスのマイノリティと言えばムスリムといったステレオタイプの見方があり、黒人はさほど意識されないことが多い。しかし現代フランス社会において黒人も一つのマイノリティ集団であり、歴史的にも彼らはつねに存在してきた。本研究では、歴史叙述のなかで等閑視されてきた黒人を主題に複数の論文を公刊し、黒人を含めた国民史の書き換えへの手がかりを提供してきた。また黒人に密接に関係する「人種主義」の歴史について新書一点を、大学生および一般向けの通史一点を上梓し、新たな視角からのフランス史、すなわち現実により近い多面的なフランス史の可能性を、学界のみならず広く一般社会に向けて具体的に発信することができた。

研究成果の概要（英文）：This study explores how a national history that includes the Black population should be written, taking into account the fact that their presence has been virtually ignored in French national history. Black populations have always been present in French history, even if they were often rendered invisible. Previous research has been almost entirely limited to the Atlantic slave trade and slavery, but recently, historians in France have begun to pay more attention to this topic, which is inextricably linked to our historical perception of the past. By focusing on Black people, a minority group today, we are able to shed light on the problems faced by other marginalized groups, such as women and those affected by gender issues. As a result, this research has adopted an intersectional perspective.

研究分野：西洋史

キーワード：国民史 植民地史 黒人史 フランス史 歴史認識 人種主義 マイノリティ ジェンダー

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者は、従来のフランス史研究において植民地がしかるべき位置を与えられてこなかった状況を踏まえ、植民地をめぐる歴史自体も、今日のフランスを形成する不可欠の要素であり、それを含めた国民史が書かれる必要があるとの立場から、植民地史を国民史のなかに取り込むことに注力してきた。それは一定の成果を得たものの、関心が国民国家形成史との関係にあったために、奴隷や奴隷制をめぐる問題を超越して、フランスにおける「黒人」の存在について掘り下げることは、次なる課題として残されていた。

一般に、アメリカのマイノリティと言えば黒人、フランスのマイノリティと言えばムスリムといったステレオタイプの見方があることも、本研究の重要な背景の一つである。意識されてこなかったとはいえ、もちろんフランス社会において黒人は一つのマイノリティ集団であり、歴史的にも彼らはつねにフランス社会に存在してきた。にもかかわらず、フランス自身において十分な研究がなされているとはいえない状況だった。黒人が社会的に注目を集めるようになったきっかけは、1990年代後半に起きた旧フランス領アフリカの出身者やその支援者による教会立てこもり事件が報道されたこと、また1998年がフランス植民地の奴隷制廃止から150周年に当たっていたことなどがあげられる。そうした背景のもと、2000年代半ばから徐々に学術研究の対象になってきた。

植民地史をめぐる研究が21世紀に入って大きく進展していることも指摘される。研究の担い手自体も多様化している。それが黒人という、これまで扱われてこなかった人びとに視野を広げる基盤となったと考えられる。黒人の源としての抽象的なアフリカにとどまらない、彼ら自身をめぐる歴史研究がフランスでも緒に着いた今、第三者的視点として日本から黒人研究を行う意義も強調したい。

なお本研究では、本来「人種はない」という基本に立ちつつ、社会で流布されている概念として「黒人」という呼称を使っていることを記しておく。

2. 研究の目的

上記のような状況を踏まえ、本研究では「フランスの黒人」の歴史を鳥瞰的に捉え、彼らの存在をフランス国民史のなか位置づけることを主要な目的としている。これは長期にわたる大きな課題であるが、少なくとも本研究をその端緒とすることは可能であろう。一つ一つのテーマをめぐる探究を積み重ねることで、およその流れを明らかにするのに貢献できようし、そのような作業によって、フランスのマイノリティといえればムスリム、といった固定的な思考に風穴をあけるだけでなく、フランス史の多様性をより具体的に示すことにつなげていく。

とりわけ黒人をテーマとすることは、「人種」の論点と切り離せない。フランスは法の前の平等を原則とする共和主義に立脚するがゆえに、実態があまり検討されないまま、人種意識が希薄であるかのように語られる傾向が否めない。フランスなどヨーロッパ諸国はいわゆる奴隷植民地を大西洋を隔てた遠いアメリカ世界にもったために、奴隷制廃止によって、彼らの存在が本国からよけいに見えにくくなった面がある。これは奴隷制を内側にもったアメリカとの大きな相違となっている。黒人に焦点を当てることで、フランスの人種観や社会の実態に迫れるはずである。

このことは歴史認識にも関連する。フランスでは植民地支配の評価は一様ではなく、「負」の歴史とみなす立場は今日でも希薄であるし、奴隷／奴隷制の歴史をめぐるても、同様のせめぎ合いがすでに顕在化している現実がある。歴史研究としてそうした価値判断をするものではないが、フランスの歴史認識のありようを、黒人を通してさらに深めることができると考えられる。

3. 研究の方法

本研究ではおもに、思想や文学作品を史料として考察を進める手法をとった。フランス本土に姿を見せる黒人の数は圧倒的に少なかった。フランスのマイノリティとされるムスリムが顕在化するのには石油危機を経た1980年代のことだが、黒人はそれよりさらに遅い時期になる。とはいえ、彼らが存在すること自体は、奴隷制時代より以前から認識されており、その分、多分に想像力も交えた記述がさまざまな媒体に記されていたと考えられる。そうした書き物にはそれぞれの時代の歴史認識が映し出されてもいよう。思想や創作の面に注目することは、このテーマに適合的な方法と思われる。

現在は、古典とされる書籍の少なくない部分が各図書館でデータベース化されており、啓蒙期の思想家などについても、多くの文献の入手が容易になっている。20世紀の雑誌や新聞などの刊行物に関しても、データ化されたもの、あるいは近年になって復刊されたものなどがあり、それらに掲載された論説や短編小説の類も史料として活用した。新しいものでは、フランス革命期の歴史的な事件を素材にした1970年代の小説も有益であった。

4. 研究成果

本科研費研究を通して、複数の成果をあげることができた。それらについて大きく4点を箇条書きにする。

(1) 第一に、人種概念をめぐるものである。なかでも思想史を軸に『人種主義の歴史』を上梓したのは大きな成果であった。人種概念は、コロンブスがアメリカ世界に到達して以降ヨーロッパにもたらされた情報を基に、徐々に構築されていった。それは黒人に限られない。本書では、他の人種との対比において、黒人という存在がいかに関係理解されてきているか、より明確にすることができた。とくに黒人の間の重層性をみきわめたことは、今日の状況を考えるに際しても重要と思われる。白人については「ホワイトネス・スタディーズ」の進展により議論の俎上にのぼることが増えているが、一方で黒人については一つの塊として捉えられるケースがまだ多く見受けられる。しかし現実には、黒人と把握される人びとは実に多様である。アフリカ人として奴隷売買にかかわった人びとと奴隷とされた人びととの相違も重要だが、奴隷植民地に出自をもつ者とそうでない者の間には、とりわけアイデンティティの認識の相違がある。それは当然のことながら、フランスの黒人と総称される人びとの内における偏差や重層性にみることができ、この点については次項で述べる他の研究成果にも生かされている。

(2) 第二に、フランス史における黒人について、複数の論考を上梓したことである。本研究の開始以前にも、研究代表者は奴隷制廃止にいたるまでの長期にわたる思想的転変、第一次世界大戦期のアフリカ人やアフリカをめぐる状況など、黒人にかかわるテーマの研究を刊行してきた。いずれも思想史や、当時の思想を反映させた史料を素材としたものである。本研究を開始してからは、ナポレオン期以降の19世紀から今日にいたる2世紀間のフランス史において、黒人がいかなる場面で注目され、また行動したか、あるいはさせられたかに関して、いくつかの側面から考察してきた。さらに本研究の最終年度に手掛けたテーマ2点に関しては、今後、論文として刊行する予定である。その中には前項で言及した黒人の間の重層性に関するものも含まれる。それらに加筆修正をしてまとめれば、フランスにおける黒人史を論じる一書とすることができよう。それは、本研究の当初の目的であるフランス国民史の書き換えの重要な一助となるはずである。

(3) 第三に、本研究ではフランスのマイノリティの一集団として黒人を取り上げたわけだが、マイノリティの存在に注目したことで、他のマイノリティとしての女性、ひいてはジェンダーの問題にも議論が拓かれた点を指摘したい。人種やジェンダーにまつわる差別が、同じ論理に基づき、同じ地平の上に展開されていることはいままでのない。それは本研究においても十分に確認された。そのことは最終的には本研究に、インターセクショナルな視点を加えることにつながった。こうした側面に論じた論文もすでに脱稿しており、近い将来に刊行される予定である。

ちなみに女性やジェンダーの問題を含んだ国民史を書くことは、フランス史研究者に課せられた現在進行中の課題でもある。加えて、フランス史をより包括的に捉えるには、さらに異なるマイノリティとして宗教を軸に据えた論点も考慮する必要がある。本研究では、それらのマイノリティを視野に入れたフランス史執筆の試みとして、主に大学生向けの教科書を共著で刊行している。題名には表れていないものの、「宗教・植民地・ジェンダー」の3点を執筆が全員が意識しながら書き下ろしたもので、従来のフランス史とは大きく異なる成果を得ることができた。これにさらに明示的に黒人という存在を組み込んでいくことが、本研究の主たる課題であった。全体として、その大きな道筋をつけることができた。

(4) 第四に、刊行した研究成果のなかに、国民意識や新たな国民史に関する論文が二点ある(フランスで2018年に刊行されたパトリック・ブシュロン編『世界のなかのフランス史』をめぐる論考と、第一次世界大戦の研究史をめぐる論考)。これらは直接的にフランスの黒人を扱ったのではないため、本研究の成果としては周縁的な位置づけにはなるが、研究代表者の国民史の書き換えという問題意識に関連するものであり、今後、この論点をさらに深めるためにも有益であったことを記しておく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 平野千果子 | 4. 巻 5月29日 |
| 2. 論文標題 書評、アルベール・サロー、小川了訳『植民地の偉大さと隷従』（東京外国語大学出会、2021年） | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 『読書新聞』 | 6. 最初と最後の頁 5 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 平野千果子 | 4. 巻 59 |
| 2. 論文標題 新刊紹介、鈴木英明著『解放しない人びと、解放されない人びと 奴隷廃止の世界史』（東京大学出版会、2020年） | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 『西洋史学論集』（九州西洋史学会） | 6. 最初と最後の頁 59-61 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 平野千果子 | 4. 巻 52巻1-2号 |
| 2. 論文標題 連鎖するディアスポラ フランス領カリブ海からのまなざし | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 武蔵大学人文学会雑誌 | 6. 最初と最後の頁 1-19 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 平野千果子 | 4. 巻 1163号 |
| 2. 論文標題 『世界のなかのフランス史』と植民地 「新しい市民」の視点から読む | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 思想 | 6. 最初と最後の頁 81-98 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 平野千果子 | 4. 巻 50 |
| 2. 論文標題 ナポレオン期の奴隷植民地グアドループ 周縁部をめぐる歴史の語り | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 武蔵大学人文学会雑誌 | 6. 最初と最後の頁 1-28 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 平野千果子 | 4. 巻 なし |
| 2. 論文標題 戦間期フランスとパリ植民地博覧会 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 東京都庭園美術館展覧会「エキゾチックxモダン - アル・デコと異郷へのまなざし」カタログ | 6. 最初と最後の頁 16-21 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 平野千果子 | 4. 巻 55-2 |
| 2. 論文標題 フランスにおける第一次世界大戦研究再訪 | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 武蔵大学人文学会雑誌 | 6. 最初と最後の頁 364-402 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件)

| |
|---|
| 1. 発表者名 平野千果子 |
| 2. 発表標題 植民地からみるフランス史 帝国から六角形、そしてフランコフォニーへ |
| 3. 学会等名 明治大学公開講座「フランス植民地主義とフランコフォニー」(招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 平野千果子 |
| 2. 発表標題 パトリック・ブシュロン編『世界のなかのフランス史』をめぐって |
| 3. 学会等名 日仏会館シンポジウム「パトリック・ブシュロン編『世界のなかのフランス史』をめぐって（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 平野千果子 |
| 2. 発表標題 フランス植民地における住民投票 脱植民地化の視点から |
| 3. 学会等名 東京大学史学会例会（招待講演） |
| 4. 発表年 2024年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 平野千果子 |
| 2. 発表標題 戦間期パリにおける人種とジェンダー ナルダグ姉妹の『黒人世界評論』を中心に |
| 3. 学会等名 専修大学国際コミュニケーション学科シンポジウム（招待講演） |
| 4. 発表年 2024年 |

〔図書〕 計6件

| | |
|------------------|-----------------|
| 1. 著者名 平野 千果子 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 岩波書店 | 5. 総ページ数 270 |
| 3. 書名 人種主義の歴史 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 吉澤誠一郎、石川博樹、太田淳、太田信宏、小笠原弘幸、宮宅潔、四日市康博（以上、編著）、平野千果子、その他140名 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 362 |
| 3. 書名 論点・東洋史学 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 竹沢泰子、ジャン=フレデリック・ショブ（編著）、クロード=オリヴィエ・ドロン、平野千果子、他13名 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 京都大学学術出版会 | 5. 総ページ数 415 |
| 3. 書名 人種主義と反人種主義 越境と転換 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 平野千果子（編著）、鈴木道也、阿河雄二郎、坂野正則、高橋暁生、長井伸仁、前田更子、小田中直樹、館葉月、南祐三、宮下雄一郎、中村督、鈴木道彦、加藤耕一、西山暁義、槇原茂 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 362 |
| 3. 書名 新しく学ぶフランス史 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 鳴子博子（編著）、平野千果子、大矢温、大久保由理、堀川祐里、後藤浩子、棚沢直子、原千砂子、河上睦子 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 晃洋書房 | 5. 総ページ数 212 |
| 3. 書名 第2章「ナポレオンと植民地 反乱・奴隷・女性」 『ジェンダー・暴力・権力 水平関係から水平・垂直関係へ』 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 井野瀬久美恵、粟屋利江、長志珠絵（以上、編者）、平野千果子、他54名 | 4. 発行年 2024年 |
| 2. 出版社 大阪大学出版会 | 5. 総ページ数 266 |
| 3. 書名 「世界」をどう問うか 地域・紛争・科学 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|